

巡礼——ヨーロッパの場合

渡 邊 昌 美

中世ヨーロッパの巡礼地や霊場を歴史学の領域で初めて取り上げたのは、おそらくL. デュシェーヌのサンチャゴ・デ・コンポステラおよびヴェズレーの聖遺物伝来に関する寺伝の批判とその成立過程の分析であろう。サンチャゴはイベリア半島の西北端にありながら使徒ヤコブの墓所であると称し、彼がスペインに初めて福音を伝え、東方に帰って殉教したが、遺骸は地中海の波に運ばれてこの地に到達し、長く不明のままとなっていたが、奇跡の啓示によって発見された、という複雑な伝來說話が信奉されていた。フランス中部に位置するヴェズレーは、新約聖書の登場人物たるマグダラのマリアの遺骸を奉安すると称した。そのためマリアをはじめベタニアの一族は東方を逃れて南フランスに漂着し、その地に伝道したが、やがてその墓所は忘れ去られる。後に啓示によってヴェズレーの修道僧が現在の地に奉遷した、とするのが寺伝である。デュシェーヌは、これら所伝の形成過程ないし製作過程を分析してその虚構性を論証したのである。いうまでもなく近代実証史学の成立という当時の学界動向に根ざした業績で、伝説と史実を分離した点、この分野での画期的な試みであった。

学問の次元で巡礼を積極的に再評価する動きは、まず文化史の領域に現れた。代表的な例が中世文学史のジョゼフ・ベディエ、および中世美術史のエミール・マールの二人である。ベディエは武勲詩の代表作「ロランの歌」を論じて、サンチャゴ巡礼路と大帝伝説の相関、ひいては巡礼路上での叙事詩成立そのものを考えた。他方、マールは巡礼路による美術（建築、彫刻）様式の伝播を考えた。

ベディエは教会や修道院で夜を過ごす巡礼の群衆、そしてそこで朗唱する吟遊詩人を想定したのである。当時スペインはレコンキスタの舞台だったから、イスラムとの対決を踏まえて大帝伝説の発生と成長を考えるのは、決して不自然ではない。ベディエの前提とした巡礼は群衆ではあったが組織された団体ではなかった模様である。これに対して、格別に感情移入の強かったマールの場合には、個人としての、むしろ孤独な巡礼が前提されているように見受けられる。峠の道標たる十字架に身をもたせ、夕焼け空を仰いでほらかな行路に思いを馳せる巡礼を思い描くとき、明らかにそれは孤独な巡礼の姿である。

オータン大聖堂正門入口のタンパン彫刻には、最終審判の情景が表現されている。群像の中に復活して棺の破片を踏みしだきながら地上に姿を現して来る巡礼がいる。E・マールはこれに触れてこういうのだ。「その長い旅は危険と苦痛に充ちており、それだけ神の憐れみに値するであろう。神は来たるべき大いなる日に、この哀れな巡礼を決してお忘れにはならないに違いない。…彼らには巡礼こそがキリスト教徒としての人生そのものと思えたのである。実際、地上に永住の場を持つことなく、天上のエルサレムへと歩み続ける旅人でないとしたら、そもそもキリスト教徒とは一体何物であろうか」。

過度の感情移入と理想化があるのは事実だが、実は中世すでに巡礼の理想像は成立していた。「神の貧者」*pauperes Dei* という言葉は、中世至る所にいた貧民一般を指したのではない。みずから進んで家郷を捨て、神の手に身を委ねた貧者、端的に言って巡礼を意味したのである。「巡礼」*pelegrinus* の原義は「異邦人」であった。さればこそ、教会は巡礼の愛護 *caritas* を説いたのである。実はキリスト教が貧困に積極的な宗教的価値を与えたことは、中世の社会倫理の理解をいちじるしく困難にしているが、言えるのは零落による貧窮などではなく自発的に財貨も家郷も捨てた者、つまり自発的な貧困、世捨て人に宗教的な価値を認めた、

ということだ。ところで、巡礼は一時的な世捨て人、いわば世捨て人の大衆版である。領主権力からも共同体からも、その保護を離れ、いわば個人が露出した状態、これくらい神と対面するにふさわしい状態はないであろう。多くの宗教や文化に巡礼という慣行、つまり信仰と旅との結合が見られるのも、大局的にはこの点から理解できるかも知れない。ともあれ、説話や伝説に登場する巡礼が決まって孤独な巡礼、せいぜい親子連れであることが示すように、実態とは別にこの種の理想像が長く生き続け、ある程度の規定力をもったことを否定できないであろう。

現在、巡礼の研究ははなはだ盛んであって、参照すべき研究は枚挙にいとまがない。いうまでもなく、アナル派ないし「社会史」の影響であって、心性史の観点から民衆信仰の一環として巡礼が取り上げられているのである。この段階で改めて聖者伝 (vita)、奇跡録 (miraculae)、移葬記 (translatio) など、一括して聖者文献 (hagiographia) と総称される膨大な記録群が史料として注目された。

P・A・シガールは先ず、ランスの聖ジブリアンの遺骨を訪れる巡礼に生じた奇跡 (病氣治癒) の件数を指摘した。1145年4月16日から同年8月24日までのおよそ四ヶ月間に実に102件の奇跡が生じていることを指摘し、奇跡が日常化していたことに注意を喚起した。さらに彼は十一・二世紀の記録から4059件の奇跡を抽出し、まず聖者生前奇跡と死後奇跡 (遺骸による奇跡) に分類した。もちろん、ほとんどが死後奇跡である。次にその内容によって奇跡をおよそ十項目に分類し、病氣治癒・災難救助が圧倒的多数を占め、懲罰もまた少なくないことを検出した。要するに現世利益である。この種史料は事実関係という観点からははなはだ信頼しがたいが、大量の史料を統計的に処理することによって型を取り出そうとしたのである。どのような奇跡が待望されていたかは、取りも直さず人々が何に苦しんだかの表現でもある。

奇跡録には、奇跡にあずかった信者の身分や郷里や年月日の記入されていることが多い。R・C・フィナケインはこの点に着目して、特定霊場の信仰圏の消長、信者の構成などの検出を試みた。いわば巡礼の立体的な構造を再構成しようとした。

*

こうして、今日の研究成果から得られる巡礼の実態は、その基本的な部分が聖遺物崇拝による奇跡 (もちろん現世利益) を求める人々であった。特に聖遺物に重心がかかっている限り、それはキリスト教の教理とは別の次元、すなわち民俗に起動力をもつ現象である。庶物崇拝すれすれ、あるいは庶物崇拝そのもので、呪術や魔術との境界線上にある。

教会には巡礼を励起し、奇跡を顕彰すると同時に、教理からの逸脱を抑圧し統制するという二律背反の、至難の責任があった。一口に教会といっても、巡礼を迎える教会や修道院と、全教会ひいては全社会を指導する会議や訓令などでは立場が違っている。前者には巡礼を集めようとする姿勢が顕著で、前述の聖者文学も強烈な宣伝の意欲にもとづいて製作されている。これに対し、後者には予想外に冷淡な、むしろ否定的な言説が多い。旅に出ることによる道徳的弛緩を指摘し、ひいては居住する場所で祈れという勧めまでが散見されるのである。

基本的な部分が現世利益の希求者だったとしても、それだけが巡礼を占めたわけではない。奇跡録からは、明らかに罪障消滅のために巡礼の旅に出た者がいたことも知られる。霊場に鉄鎖を奉獻する例がある。多くは捕囚解放の報恩だったと思われるが、稀には罪障消滅の報酬でもあるものもあるらしい。罪の重さを自覚すべく身に鎖を巻いて長途の旅に出る。目指す霊場の近くまで来て、突然鎖の重みが減じ、罪の宥されたことを悟る、とは記録に出る「奇跡譚」の一類型である。

また、まったく理由なしに、衝動に駆られて巡礼に出るケースもあった。「子供十字軍」はあまりにも有

名だが、中世後半期、フランス北西端のモン・サン・ミシェルには間欠的に巡礼の大群衆が殺到した。「天使の声を聞いた」と称して、鉄床に熱鉄を残したまま、あるいは家畜を繋いだ鋤を打ち棄てたまま、巡礼の途にのぼる職人や農夫が数知れず、教会の指導者が対応に苦慮している。この種の現象は、他にも頻発していたはずである。

こうして、巡礼にはさまざまなレベルの構成要素があり、また構成形態が混在していたので、その識別は容易でないとしても、総括的に巡礼を論じるに際しても、そのことは意識して置く必要があるだろう。

巡礼は愛護の対象であった。ただ、愛護すべきことが絶えず強調され、巡礼の待遇をめぐる応報禍福を分ける説話が残っていること自体、巡礼と通過地方住民との間に常にうろわしい関係があったのではないことを物語っている。近代になれば、巡礼の浮浪との類同、はては準犯罪人視しないまでも、蔑視し警戒する風潮が広がる。ゲーテがイタリアに旅した時（1786年）、乗合船に二人の巡礼と乗り合わせた。彼らは船室に入らず甲板の片隅にうずくまっていた。「彼らのそばに来るのをほかの客がきらうので」とある（『イタリア紀行』）。中世においてはどうであったか。通過する異分子に対して、地域共同体が常に寛容であったとは到底考えがたいのである。

さらに、進んで巡礼を襲撃する野盗の類も出没した。流れに石を据え、盗賊の潜む叢林を拓いたという「敷石」の聖ドミンゴのような隠修士の事績がこれを語っている。巡礼の方でも、危険に対する方策を講じたのは当然である。イギリスの一修道士が文書の紙背に村人の所言を書き留めた珍しい史料では、村人は団体を作ってサンチャゴへ巡礼している。夜間は林のなかに野営したが、その際には交替で不寝番を立てて警戒を怠らなかつた。巡礼には、個人、群衆、団体と在り方は多様だが、いずれにしても巡礼と地域共同体の間には、扶助のみならず緊張関係もまた存在したのである。

時代によって、当然ながら、巡礼も様相を異にする。大きな画期は宗教改革であった。プロテスタントが聖遺物崇拝を排撃しただけでなく、カトリック側もトリエント公会議で迷信的な要素の排除につとめ、公会議の精神で教育された聖職者が大勢を占めるに至った時、教会は巡礼に対していちじるしく冷淡となり、民衆の巡礼参加にも退潮が現れる。

やがて、とくに十九世紀、新しい条件が巡礼を支える。一つは大衆輸送機関、汽船と鉄道の発達であり、今一つは印刷物による宣伝手段の普及である。そして中世に見られなかった宗教以外の促進要因の働く場合がある。フランスの場合について見れば、シャルトル巡礼の鼓吹のように青少年の社会教育運動に発している場合もあるし、ナショナリズムと関連する場合も見受けられるのである。新霊場の成立も決して跡を絶ったわけではない。ただ、聖遺物の出現でなく、顕現や幻視が一般的である。そして聖者崇拝は聖母崇拝に収斂して行く傾向を示す。1858年、ルルドの聖母顕現は一連の事件の頂点であった。

[参考書目抄]

L.Duchesne., *La légendes de sainte Marie-Madeleine. Annales du Midi*, 1893.

Idem., *Saint Jacques en Galice. ibidem*, 1900.

J.Bédier, *Les légendes épiques*. 2^e édition, 4 vols., 1914-21.

Emile Mâle, *L'art religieux du XII^e siècle en France. Etudes sur les origines de l'iconographie du moyenâge*, 1922. [田中仁彦・池田健二他訳、エミール・マール『ロマネスクの図像学』国書刊行会、2 vols. 柳宗玄・荒木成子訳、エミール・マール『ヨーロッパのキリスト教美術』岩波文庫、2 vols.]

P.A.Sigal, *Maladie, pèlerinage et guérison au XII^e siècle. Les miracles de saint Gibrien à Reims. Annales E.S.C.*, 1969.

Idem., *L'homme et le miracle dans la France médiévale, XI^e – XII^e siècles*, 1985.

R.C.Finucane, *Miracles and pilgrims. Popular beliefs in medieval England*, 1977.

J.Chélini et H.Branthomme, *Les chemins de Dieu. Histoire des pèlerinages chrétiens des orinines à nos jours*, 1982.

P.J.Geary, *Living with the Dead in the Middle Ages*, 1994. [杉崎泰一郎訳、パトリック・ギアリ『死者と生きる中世』白水社、1999]

渡邊昌美『巡礼の道。西南ヨーロッパの歴史景観』中公新書、1980。

同 『中世の奇蹟と幻想』岩波新書、1989。

懐徳堂友の会編『道と巡礼』和泉書房、1993。

関 一敬『聖母の出現—近代フォーク・カトリシズム考—』日本エディタースクール出版部、1993。

歴史学研究会編『巡礼と民衆信仰』（「地中海世界史」第4巻）青木書店、1997。

青山吉信『聖遺物の世界』山川出版社、1999。

杉谷綾子『神の御業の物語—スペイン中世の人・聖者・奇跡—』現代書館、2001。



公開シンポジウム会場（共通教育棟大講義室）



公開シンポジウム（内田氏報告）